

保育所の子育て支援におけるポートフォリオの活用 — 保護者の記述内容の分析を中心に —

松井 剛太¹・片岡 元子¹・水津 幸恵²

Using portfolios to support parent's child-rearing: Analysis of descriptions by parents

Gota MATSUI¹, Motoko KATAOKA², Sachie SUIZU³

Abstract: The purpose of this study is to examine the practical use of portfolios to support parent's child-rearing in a day care center. This study focuses on the description for three years by nine parents with children of 0, 1, and 2 years of age. Analyses are based on five perspectives of behaviorism, meritocracy, moralism, interpretivism, and empathy. Four parents also participated in focus group interviews. Findings from an analysis of the descriptions confirmed that about sixty percent of the descriptions could be classified under behaviorism and meritocracy. The results from the qualitative analysis of focus group interviews supported the view that parents used their portfolios as source of information for their child-rearing and re-evaluating the characteristics of their children through the differences in their children's behavior between home and the day care center. Mixed data of these descriptions and the focus group interviews suggested two possibilities for the practical use of portfolios. First, teachers can provide the information to parents according to child's developmental stage. Specifically, two-year old children can talk with their parents regarding the contents of the portfolio. This situation is different from that with children aged 0 years old and one-year olds. Second, teachers should be aware that the acceptance of such portfolios differs between parents with first-born children and those who have other children already.

Key words: child-rearing, portfolio, parents, analysis of description

I. 問題と目的

昨今、諸外国のみならず日本の保育現場でも、写真を活用したポートフォリオによって、保育を可視化する実践が多く報告されるようになってきた（森，2016）。ポートフォリオは、個々人の記録をファイルにすることを特徴とする記録である。そのため、特定の子どもの理解を深めること（大宮，2010；橋川，2013）や、要録の素材としての活用（森，2016）など、その有用性が指摘されている。

一般にポートフォリオは、子どもの学びのプロセスを丁寧に表す評価法として紹介され、保育の質の改善に寄与するものとされている。ただし、実際には保育者の目的意識によって、保育現場で持つ意義は変わることが考えられる。例えば、ポートフォリオは、子どもの育ちを保育者が記述した後、保護者がそれぞれの家庭に持ち帰るという特徴がある。そのため、保護者が保育者の記述を読むことで、子どもの「できる」「できない」の結果だけを見るのではなく、子どもが何をしようとしているのかを見る視点に気づくこと、子どもの興味が変化していくことに気づくこと、子どもの視点に立った遊びの見方ができるようになることが報告されている

1 香川大学

2 お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科

(高畑, 2016)。このように、ポートフォリオは個々人に特化した記録であるがゆえに、活用の方法によっては家庭の子育てにも意義を見出せることが示唆される。

従来、保育現場での記録物といえば、連絡帳やクラスだよりが主であった。近年、それらを活用した子育て支援として、連絡帳やクラスだよりの効果が再評価されている(林, 2015; 柴崎, 2016)。これらは連絡帳に書かれた保護者の記述を時間経過とともに分析することを通して、保護者と保育者の関係性の変化を明らかにしたものである。しかし、ポートフォリオは保護者と保育者の間で互いを宛先にしてメッセージの交換をするものではない。宛先は子どもであり、子どもの育ちに対して、保護者と保育者が共にメッセージを記入するものである。連絡帳など、保護者と保育者の間でのメッセージの交換を前提とする記録物は、保護者から保育者に向けての相談やお願いなどが中心になるだろう。一方、子どもに向けたメッセージを書くポートフォリオは、保護者が子どもの育ちに対する見方を書くことが多くなるため、その変化が把握しやすいと思われる。

そこで本研究では、ポートフォリオを作成する過程において、保護者の子どもに対する見方がどのように変容していくのか、また実際の子育てにおいて、何に影響を及ぼすのかを検討することを目的とする。そのため、0歳から2歳までの3年間に渡り、ポートフォリオの作成に携わった保護者を対象にして、記述内容の分析とフォーカスグループインタビューの結果を合わせて検討する。

Ⅱ. 方 法

1. 対象者について

(1) ポートフォリオの記述内容の分析

2013年4月からK県内のA保育園にて0, 1, 2歳児クラスを対象に一人ひとりの子どものポートフォリオを作成している。これは、A4サイズのファイルに、子どもの生活の記録と写真、保育者、保護者のコメント欄を設けて、月に1度のペースで作成するものである。本研究では、0, 1, 2歳児を育てる保護者の「子育て」という側面を重視し、ポートフォリオの作成を通して、保育者と保護者が保育中の子どもの経験を共有することを第一義に考えた。また長期的には、子ども自身がポートフォリオを読み返すことで、乳幼児期に自分が経験したことや、

そのときの保育者と保護者の考えや願いを知ることを念頭に作成した¹⁾。

本稿では、2013年時点で0歳児クラスに所属し、2016年3月の2歳児クラス終了時まで3年間を通してポートフォリオを作成した保護者9名の記述内容を分析の対象とした。いずれもポートフォリオのコメント欄の記述は母親が中心であったが、父親、祖父母、きょうだいなど母親以外の家族成員が一部記述している家庭もあった。なお、A保育園の0, 1, 2歳児クラスはいずれも1クラスであったため、対象となった子どもたちは3年間同じクラスに所属していた。そのため、年度によって保育士の入れ替わりは一部あったものの、9名の保護者は同じ担当保育士のもとでポートフォリオを作成したことになる。

(2) フォーカスグループインタビュー

2017年2月に、上記の記述内容の分析対象者のうち、調査の協力を得た4名(以下、AさんからDさんとする)にフォーカスグループインタビューを実施した。インタビューの時間は45分であった。Aさんは父親、Bさん、Cさん、Dさんは母親であった。なお、AさんとDさんはポートフォリオの対象となったのが第一子で、BさんとCさんはいずれも第二子以降であった。また、Bさん、Cさんは上のきょうだいもA保育園に通園していた。インタビュー内容は、ICレコーダーで録音し、直ちに逐語録化した。なお、質問は、「ポートフォリオで子どもの様子を知ること、子育てや子どもの見方に何か変化がありましたか」「ポートフォリオを始めてから子育てや家族の関係性に影響はありましたか」の2つであった。本稿のフォーカスグループインタビューでは、子育てにおける影響を探るため、後者の「ポートフォリオを始めてから子育てや家族の関係性に影響はありましたか」という質問への回答を分析の対象とした。

(3) 倫理的配慮

記述内容の分析、フォーカスグループインタビューへの協力者には、いずれも研究目的、調査方法、個人情報の守秘などを書面と口頭で説明して了解を得た。

2. 分析手順

(1) ポートフォリオの記述内容の分析手順

下記の手順で保護者9名のポートフォリオの記述内容を分析した。まず、一次分析として、

保護者9名の記述内容をすべて文字に起こしたものを月別に整理し、さらに1文ごとに分けて、記述の分析単位とした。次に、二次分析として、保護者の子どもに対する見方がどのように変容していくのかを捉えるため、小田(2011)が保護者や保育者が子どもを見る基準として提示した5つの見方を用いて、1文ごとに記述の分類を行った。具体的には、子どもの行動に対して、客観的に見る「行動主義的見方」、「できる」「できない」で見る「能力主義的見方」、道徳的に「正しい」「正しくない」で見る「道徳主義的見方」、自身の解釈を加えて見る「了解主義的見方」、子どもの気持ちに共感して見る「共感主義的見方」の5つの見方に分類した。なお、記述のうち、子どもの行動に対する記述ではないものについては分析から除外した。分類は、筆者1名と協力者2名がそれぞれに行った。その後、3名の評価を照らし合わせ、3名または2名が一致したものはそれを採用し、3名とも異なった場合は協議をして決定した²⁾。最後に、三次分析として、該当なしを除いた5つの見方の評価結果を、0歳児クラス、1歳児クラス、2歳児クラス時点別に集計し、0、1、2歳の3年間で5つの見方がどのように変容したのかを探った。さらに、個々の保護者についても、それぞれ3年間での変容を明らかにした。加えて、当時各クラスを担当した保育者に対して、この結果を見せ、ポートフォリオを作成したときのことを振り返ってもらうとともに各保護者の子育ての様子についても聞き取りを行い、分析の材料とした。

この手順に基づき、ポートフォリオに携わった保護者の記述内容から見る子どもの見方が3年間でどのように変容したのかを検討した。

(2) フォーカスグループインタビューの分析手順

フォーカスグループインタビューは、安梅(2001)を参考に分析を行った。具体的な分析の手順は次のとおりである。まず、逐語録化したテキストを熟読した上で、1文をコーディングユニットとして設定した。次に、コーディングユニットごとに、話者、その内容を代表するラベルを付けて、コーディングブックにまとめた。最後に、ラベルの意味内容が似ているもの同士をカテゴリー化して整理し、全体での特徴、さらに話者ごとの語りの特徴を明らかにした。

(3) 分析結果のまとめ

記述内容の分析から全体的な傾向を探った上で、フォーカスグループインタビューを実施し

た。それらの結果を合わせて、ポートフォリオが保護者の子どもの見方や実際の子育てにどのような影響を及ぼしたのかを検討した。

Ⅲ. 結果と考察

1. 記述内容の分析

(1) 全体の傾向について

先述した二次分析から明らかになった全体の傾向を下記の図1に示す。なお、結果は小数点第2位以下切り捨てで示している。

全体で見ると、行動主義的見方が最も多かった(全970中357:36.8%)。これは、ポートフォリオの写真に対して、「～したんだね」というように客観的に記すものが多かったことが要因と考えられる。次に多かったのは能力主義的見方であった(全970中344:35.4%)。

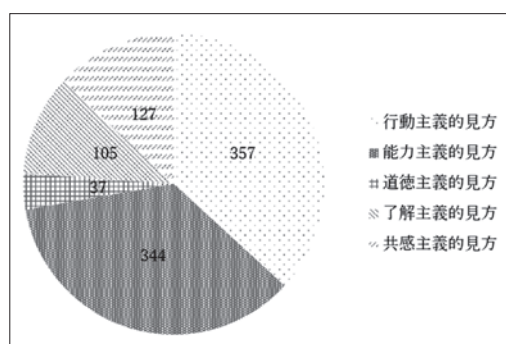


図1 記述分析における5つの見方の分類：3年間の総計

これに該当する記述の多くは、子どもの行動について、「できたこと」に対する喜びを示したり、「次にできそうなこと」に対する期待を込めたりするものであった。「できないこと」に関する記述はほとんどなかった。この二つの見方が7割以上であった。次に、共感主義的な見方(全970中127:13.0%)、了解主義的な見方(全970中105:10.8%)が続いた。また、道徳主義的な見方(全970中37:3.8%)は、該当数が少なかった。

(2) 年次別の変化について

三次分析から明らかになった保護者全体における記述分析結果の年次別の推移を下記の図2に示す。0歳児クラスでは、行動主義的見方が98、能力主義的見方が118、了解主義的見方が31、共感主義的見方が27、道徳主義的見方が14の総計288であった。1歳児クラスでは、行動主義的見方が119、能力主義的見方が106、了解

主義的見方が29、共感主義的見方が53、道徳主義的見方が10の総計317であった。2歳児クラスでは、行動主義的見方が140、能力主義的見方が119、了解主義的見方が43、共感主義的見方が47、道徳主義的見方が13の総計362であった。

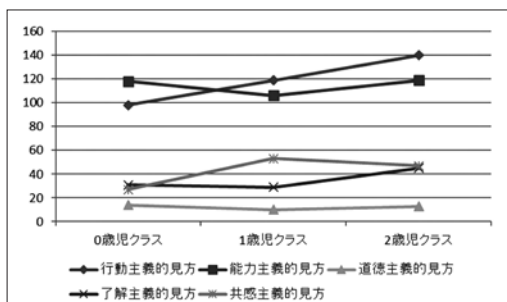


図2 記述分析結果：3年間の推移

0歳児クラスから2歳児クラスに至る3年間の推移を見ると、0歳児クラスのときは、能力主義的見方が最も多かったものの、1歳児クラス以降は行動主義的見方が多くなった。また、共感主義的見方が1歳児クラスのとき、了解主義的見方が2歳児クラスのときに微増した。道徳主義的見方はほぼ変化が見られなかった。このように、おおむね3年間で大きな変動はなかったことが示唆された。

当時、各クラスを担当した保育者によると、0歳児クラスのときには個々の身体的な発達に関する写真が多くなり、2歳児クラスにかけて徐々に得意な遊びのことや友達とのかかわりなどの写真を多く載せたように思うとのことであった。佐藤（2009）は、子育て初期の母親は子どもの身体的な発達に着目し、その発達状態にこだわる傾向にあることを指摘している。本研究においても、0歳児クラスのときの保護者は、自立歩行に至るまでの身体的な発達の過程において「できたこと」や次に「できそうなこと」への期待をポートフォリオの記述に込めたため、能力主義的見方が多かったことが考えられる。

一方、得意な遊びのことや友達とのかかわりが増えた1歳児、2歳児クラスのときには、家庭とは違った子どもの様子や新たな発見があったため、行動主義的見方に関わる記述（「～しているね」、「～したんだね」）が多くなったようである。このことは、後述するフォーカスグループインタビューの分析からも読み取れた。

後段では、これにフォーカスグループインタビューの結果を加えることで、実際の子育てに

どのような影響があったのかを検討する。

2. フォーカスグループインタビューの分析

逐語録を整理した結果、59のコーディングユニットになった。それらにラベルを付けて、カテゴリー化したところ次のようになった（表1）。カテゴリー数は8つで、「子育ての変化」「子どもの良さを発見」「会話のきっかけ」「担当保育士への信頼」「保育園への安心感」「本人の喜び」「連絡帳との違い」「自信の喪失」であった。最も該当数が多かったのは、「子育ての変化」であった。これは、ポートフォリオの内容が、子どもと関わるときの情報源になったことや、子どもの成長に関して、保育園での様子がわかるので家庭の子育てにも反映できること、また子どもとの関わりについて、父親の変化が見られたという内容であった。次に多かった「子どもの良さを発見」のカテゴリーでは、家では見られない子どもの姿を知ることができる、保育士が子どもの成長を丁寧にとらえてくれることによって、子どもの良さが発見でき、理解が多面的になるということがわかった。「会話のきっかけ」は、ポートフォリオが夫婦、祖父母、きょうだい、いとことの間での会話のきっかけになったという内容であった。

また、ポートフォリオが担当保育士や保育園への信頼感、安心感にも関わっていることが述べられた。「担当保育士への信頼」のカテゴリーでは、担当保育士が一人一人の子どもを丁寧に見ていることに感心、感謝の言葉があった。中には、ポートフォリオの取組をきっかけに子育ての相談をするようになった保護者もいた。そして、「保育園への安心感」のカテゴリーでは、ポートフォリオによって、子どもの保育園での生活がわかり、安心するという内容が述べられた。

「本人の喜び」は、ポートフォリオの対象となっている子どもが家族から注目してもらえる機会になっているという内容であった。この語りは、上のきょうだいがいる子どもの保護者にのみ見られたものであり、「会話のきっかけ」のカテゴリーとも関連していると考えられる。「連絡帳との違い」のカテゴリーは、ポートフォリオに写真があることの利点や成長の確認として使用できる点で連絡帳と異なることがわかった。「自信の喪失」は、1つだけであったが、ポートフォリオで保育士がしていることを見て、自分にはできないと感じてしまうとのことであった。

表1 フォーカスグループインタビューの分析結果【() は該当数】

カテゴリー名	該当コード	代表的な語りの内容
子育ての変化 (13)	子どもと関わるときの情報源 (6)	プールここまではいけるんや、じゃあ今年プール行こうとかか。すぐくものさしに、自分のものさしにはなりますね。(Aさん)
	保育園での様子 (5)	初めての子育てで、このぐらいの月齢でこのぐらいできるという知識はあるので、実際その月齢でできていないところばかり気になったりしたけど、先生から、個人差が大きいもので長い目で見ないといけないのを、(ポートフォリオを) 渡してくださるときも、コメントをしながら先生が渡してくださっていたんで、焦らず子育てできたかなと思います。(Dさん)
	父親の変化 (2)	父親はメモリー (ポートフォリオ) を月一回見てくれて、見てるうちに、すごいがんばってるんだというのが感じるらしくって、それからすごいほめるようになった、良いところをほめるようになった、それまでは結構なんでできないのみたいな感じだったけど、結構はめて育てるっていう感じが増えたかなっていう感じが、横で見てて思いますね。(Dさん)
子どもの良さを発見 (10)	家との違い (5)	保育園でしかあまり、まあ家でもやってるんだらうけど、見過ごしてる真剣な顔っていうのを、その瞬間をとらえてくれている。(Bさん)
	保育士の読み取り (5)	二人目になると、仕事でかまっていられないし、細かいところも見てあげられなくて、やっぱりちょっと雑になってくるので、こういう写真とかで様子が見れて、先生の目線でこんなことができるようになったっていうのが毎月、教えてもらえると、補うというか、それは私がしないといけない事なんですけど、この子を知のことを少し補ってもらえて助かるなって思います。(Cさん)
会話のきっかけ (9)	夫婦での会話 (2)	夫婦で、こういうことしてるんやなあーっていう、会話のきっかけにはなりました。(Bさん)
	祖父母との会話 (4)	写真でちゃんと、こういうことできてるっていうのが見えるんで、じいちゃんばあちゃんのとこに行った時に、会話のきっかけにはすごくなってたなって思います。(Aさん)
	きょうだいで会話 (1)	普段はもう、忙しくバタバタとね、仕事終わって帰ったら、あまりそれぞれの話を聞くのは大変で、お兄ちゃんとかが、「○○ (子どもの氏名) こんなんしたん、これなにしょん」とかっていうのをきょうだいも仲良く会話するきっかけになってるかなと思います。(Bさん)
	いとことの会話 (2)	○○○がいとこの中で一番下なんで、かわいいとかいろいろこう見て、すごいとか言ってくれるんですね。(Cさん)
担当保育士への信頼 (8)	保育士の子ども理解に感心・感謝 (7)	ここの保育園は、先生がすごく大変なんだと思うんですけど、ほんとに子ども一人ひとりのことをよく見てくださっていて、メモリー (ポートフォリオ) を通して先生がもう少ししたら成長しそうみたいなのも見てくれているのが、すごく一人ひとり見てくれていないと分からないところだと思うので、やっぱり先生すごいなあ。(Bさん)
	相談相手としての保育士 (1)	やっぱり (担当保育士が) 個性をつかんでくれているので、こっちも時々相談したりとか、そういう意味ではすごいよかったかなと思います。(Dさん)
保育園への安心感 (7)	保育園の生活が見えて安心 (7)	親近感がわいたっていうか、保育園ってこういうところだから楽しいんだらうなあとか、知らない時はちょっと怖いやないですか、全く情報がないので。(Aさん)
本人の喜び (6)	注目される機会 (6)	日々忙しいので、普段は保育園でどうやったとかいう話もしないんですけど、メモリー (ポートフォリオ) を持って帰った日は、これを開いてみんながこんなことしたんだとかっていう、○○ (本人) に注目する時間ができたっていうのはやっぱり変わったところですかね。(Bさん)
連絡帳との違い (5)	写真で理解 (1)	毎日のやつ (連絡帳) の方がすごい詳しく書いてたりとかするんですけど、意外とそういうところを写真に撮ってないし、こういう普通の目線っていうのは撮ってないんで、ああこんな時もあったんやなって、実感はできるかなあと。(Aさん)
	成長の確認・振り返り (4)	連絡帳を読み返すことってあんまりないんですけど、メモリー (ポートフォリオ) は振り返ってみて、ああ成長したなあって思う感じ、アルバムって感じがしますね。(Cさん)
自信の喪失 (1)	自分の子育てへのふがいなさ (1)	逆に自分が何もできないなって、こういうの見てもなんですけど。(Aさん)

3. 記述内容とフォーカスグループインタビューの分析結果を合わせて

ここまで、ポートフォリオの記述内容の分析とフォーカスグループインタビューの分析を示した。これら2つの結果からおおよそ推察できることは、保護者はポートフォリオの写真や記録に対して行動主義的、能力主義的に見る傾向が強く、それらを子育ての参考にしたり、子どもの理解を深めたりすることに活用しているということであった。

そこで続いては、フォーカスグループインタビューの対象者について、個々における記述内容の推移とフォーカスグループインタビューでの語りの特徴を検討することによって、ポートフォリオが保護者の子育てをどのように支えたのかをさらに詳細に探究する。

(1) フォーカスグループインタビュー参加者の記述分析の結果

AさんからDさんの記述内容の分析を図3に示した。Aさんについては、86の分析単位の

うち、54が能力主義的見方であり、全体の6割以上となった。3年間の推移を見ても変化なく多かったことがわかる。

Bさんも、86の分析単位のうち、40が能力主義的見方で最も多く、半数近くを占めていた。しかし、3年目には能力主義的見方の数は減少し、共感主義的見方の数が微増していた。

Cさんは、全体で70の分析単位であったが、2年目に能力主義的見方の数が減少し、それに対応するように行動主義的見方の数が増加していた。また、3年目には了解主義的見方の増加が見られた。

Dさんは、73の分析単位のうち、42が行動主義的見方で年を追うごとにその数が増加していた。その他の見方はいずれも数が少なかった。

全体的に、共感主義的見方、了解主義的見方、道徳主義的見方は、数が少なく大きな変化はなかった。一部、Aさん、Cさんにおいて、了解主義的見方が3年目に少し増加したことが読み取れる。

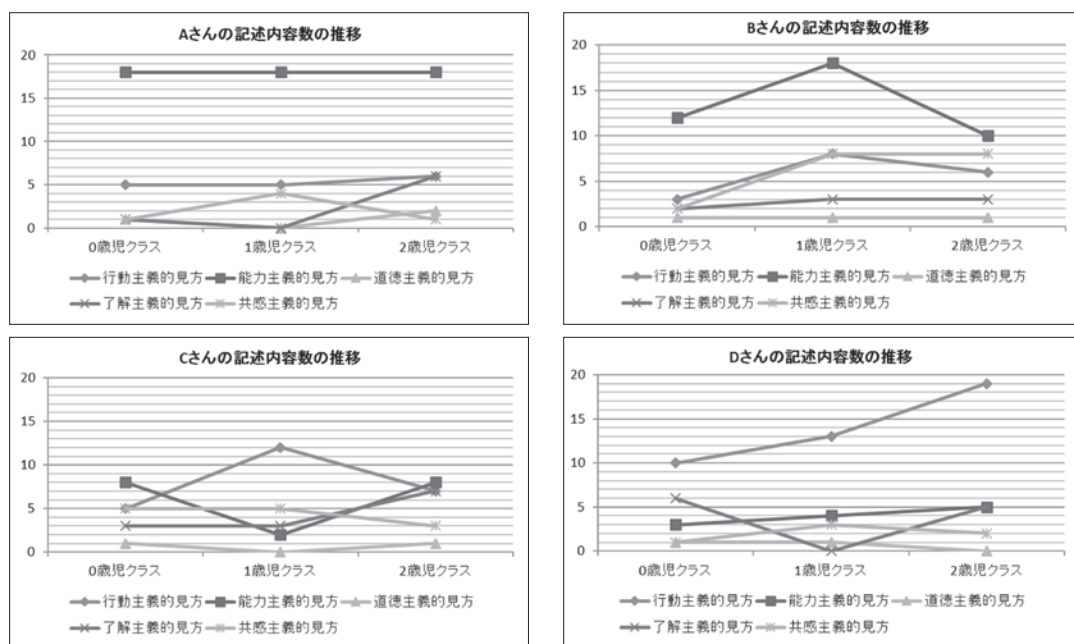


図3 AさんからDさんの個別の記述分析結果

表2 話者ごとのカテゴリー該当数

	子育ての 変化	会話の きっかけ	子どもの 良さを発見	保育所への 安心感	担当保育士 への信頼	連絡帳 との違い	本人の喜び	自信の喪失
Aさん	8	3	0	5	0	1	0	1
Bさん	0	2	6	1	2	0	3	0
Cさん	1	4	3	0	5	2	3	0
Dさん	4	0	1	1	1	2	0	0

(2) フォーカスグループインタビューにおける 個々の語りの特徴

次にフォーカスグループインタビューにおける話者ごとのカテゴリー該当数を表2にまとめた。

これを見ると、Aさんは「子育ての変化」と「保育園への安心感」が多かった。先述したようにAさんは第一子の子育てであった。そのため、表1で実際の語りの内容を示したように、ポートフォリオから子どもの保育園での生活を知ること「保育園への安心感」をもつと同時に「子育ての情報源」として実際の子育てに活用していたと考えられる。

一方、Bさんは「子育ての変化」に関する語りは全くなく、「子どもの良さを発見」「本人の喜び」が多かった。Bさんの場合、ポートフォリオの対象になった子どもは第四子であり、上のきょうだいもA保育園に預けていた。そのため、Aさんと異なり、ポートフォリオから子育ての参考になる情報や保育園への安心感を得たことはなかったようである。しかし、四人目の子どもであるために、家で見過ごしがちな子どもの良さをポートフォリオから発見したり、子ども本人が家族から注目をされたりするきっかけとして使用されているようであった。

ポートフォリオの対象が第二子であったCさんも子育ての変化に関する語りはほとんどなく、「担当保育士への信頼」「会話のきっかけ」「本人の喜び」の順であった。特に、担当保育士に対する感心・感謝に関する語りが強く、ポートフォリオを通して担当保育士への信頼が増したようであった。またCさんの場合は、いとこの家に本児を預けることが多かったという事情から、いとこの会話のきっかけになったり、本人が注目される機会になったりしたことがわかった。そういったことを通じて、表1の連絡帳との違いのカテゴリーにあるように、子どもの成長を確認していたのであろう。

Dさんは、Aさん同様にポートフォリオの対

象は第一子であった。インタビューの中での発言が他の人に比べて少なかったが、「子育ての変化」に言及することが多かった。表1に実際の語りを示したように、ポートフォリオを通して父親の変化が顕著に見られたことや、初めての子育てで感じていた焦りが解消されたことがわかる。

(3) 個々の家庭におけるポートフォリオの子育ての影響について

これらの分析から、個々の家庭の子育てにおけるポートフォリオの影響が詳細になった。

Aさんは、ポートフォリオを通して、子どもが「できたこと」や「できそうなこと」を知り、それを実際の子育ての参考にしていただと考えられる。

Bさんの場合は、普段見過ごしがちな子どもの「できたこと」について、ポートフォリオで確認していたことが推察された。そして、子どもの年齢が上がり、2歳児クラスの頃になると、本人が注目される機会として活用されたのであろう。これは、3年目に能力主義的見方が減少し、共感主義的見方が増加したことからも読み取れる。松井（2015）によると、子どもが2歳児クラスの時期には、ポートフォリオを見ながら、本人も家族の会話へ参加することが指摘されており、Bさんの家庭もこれに該当したものと思われる。

Cさんは、主に担当保育士の見方に感心しつつ、家族や親族との会話のきっかけにしていた。そして、本人が注目される機会も持ちながら、子どもの成長の確認や振り返りに活用していたのであろう。

Dさんは、ポートフォリオの写真や記録について、客観的に受け止める傾向が強かった。ただ1年目、3年目については、了解主義的見方も多く見られたように自身の解釈を加える記述も多く、ポートフォリオを通じて、子育てを見つめなおしたり、保育士への相談に活用したりする様子が読み取れた。

IV. 総合考察

ここまでポートフォリオの記述分析やフォーカスグループインタビューの分析を通して、保護者によるポートフォリオの受け止めの特徴や子育てへの影響について、一定の知見が得られた。そこで、これらを踏まえて、保育現場での子育て支援におけるポートフォリオの活用可能性を以下に述べる。

1. 子どもの発達段階に応じた活用

本研究では、0, 1, 2歳の子どもを対象としたポートフォリオについて検討した。記述分析の結果から、保護者は身体的発達の著しい0歳児クラスのときには個の発達を中心にした能力主義的な受け止めをする傾向にあった。また、フォーカスグループインタビューの分析を含めると、コミュニケーションに関する発達が進む2歳児クラスになってくにつれ、本人も含めた会話が促されるなど家族関係に肯定的な影響が見られたことが示唆された。

したがって、対象となる子どもの発達段階に応じて、子育てへの影響が変化することを考慮したうえで、ポートフォリオを活用することが考えられる。小田(2011)は、子育てにおける保護者の態度として、共感主義的な見方で子どもと関わる事が望ましいように述べている。しかし、AさんやDさんの分析結果にもあったように、0歳児で、とりわけ第一子の子育ての場合は、子どもの姿に共感するような見方や子育てをする中での余裕は持ちにくいことが推察される。本研究の結果では、能力主義的な見方であっても、「できない」ことに着目する記述はほぼなかった。つまり、保護者は、「できたこと」や「次にできそうなこと」を肯定的に受け止め、子どもの発達を理解しつつ、子育ての参考にしていたと考えられる。

本研究では、ポートフォリオの記録を作成するにあたり、ニュージーランドのラーニングストーリーを参考に単純な「できる」「できない」の結果ではなく、学びの過程を大切にするという考えに基づいていた。しかし、保育者がそういった意識のもとで作成したポートフォリオであっても、特に乳児期には「できたこと」が気になり、能力主義的な受け止めをするものと推察される。

一方、2歳児クラスになってくると、ポートフォリオを介した会話を子ども本人とするようになっ

ていた。今回、記述分析の中では共感主義的な見方は多くなかったものの、フォーカスグループインタビューの結果を踏まえると、ポートフォリオを通じた会話の中で子どもに対して共感主義的な言葉かけをしていたことが示唆された。

以上のことから、保育者は共感主義的な見方のみを推し進めるのではなく、対象となる子どもの発達段階に応じて、保護者の受け止めや家族の関係性が変わることを長期的に見通した上で、ポートフォリオを子育て支援に活用する可能性が見い出せた。ただし、Aさんのように、能力主義的な見方がかなり強い保護者には留意する必要があるだろう。保育者によると、Aさんは子どもが日々きちんと生活できていたかどうかを非常に気にして、できていないと落ち込む様子が見られたという。このように、見方が限局的になる傾向の強い保護者に対しては、ポートフォリオの写真やコメント、そしてポートフォリオを渡すときの言葉かけを通して、多面的な見方を提供することが重要になるだろう。

2. 子どもの出生順位に応じた活用

フォーカスグループインタビューの結果を含めると、ポートフォリオの対象となる子どもが第一子である場合とそれ以外では、ポートフォリオに対する保護者の受け止めが異なることが推察された。

第一子であったAさんとDさんの場合、記述分析の結果は能力主義的な見方が強いAさんと行動主義的な見方の強いDさんというように分かれていたものの、ポートフォリオが子育てに変化をもたらした点は共通していた。両者ともに、子どもの保育園での生活に関する情報を得て、保育園への安心感や信頼感を持つと同時に、子どもとの関わりや子育ての方法の参考にしていくことが明らかになった。これは初めての子育て、初めての保育園という状況が影響していると考えられる。本来ならば、送迎の際などに会話で情報共有することが望ましいと思われるが、十分な時間のない保護者も多い。そういった中で、特に第一子の子育て中の保護者にとっては、連絡帳だけでなく、写真も付いて保育の様子がわかるポートフォリオは子育てに寄与するものであると考えられる。

一方、第四子のBさんと第二子のCさんについては、両者ともに、子どもの良さを発見することや本人の喜びとなっていることがわかった。これは、AさんとDさんと異なり、子ど

もとの関わりや子育ての参考にするというものではなく、子育てに慣れたからこそ見過ごしがちな子どもの成長やそれに対する喜びを補う役割をポートフォリオが果たしていたことが明らかになった。また、Bさんにはきょうだいが多く、Cさんの場合は、いとも関わる機会が多いことから、ポートフォリオの対象となった本人が注目されるきっかけになって喜んでいて。このように、子育てに慣れ、保育園での生活にも理解がある状態の保護者に関しては、ポートフォリオは本人やきょうだいも含めて家族全体で子どもの育ちを楽しむ作用をもたらしていると考えられる。

以上のように、個々の保護者に対する子育て支援という点からポートフォリオの活用を考えると、対象となる子どもの出生順位で家族内での作用が変わることを考慮する必要があるだろう。

V. 本研究の限界と課題

本研究では、保育現場の子育て支援におけるポートフォリオの活用可能性について検討した。記述分析とフォーカスグループインタビューの分析を合わせて検討することで一定の知見は得られたものの、0, 1, 2歳児のみを対象としたポートフォリオを分析の対象としていた点、記述分析が9名、フォーカスグループインタビューが4名という対象者であった点において限界がある。また、本稿では、保護者の記述分析において、ポートフォリオに使用された実際の写真や記録、及び保育者の記述との関連において分析をしていない。保護者が書く記述内容は、保育者の記述に影響されていることが想定される以上、十分な検討とは言えないだろう。これらの課題については、さらなる分析を進めて、子育て支援に資する活用について検討する必要がある。

注

- 1) ポートフォリオの様式や作成の手続き等は、後述した引用文献の「松井剛太（2015）保育所における保護者の保育参加を目指したポートフォリオの作成．乳幼児教育学研究，（24），39-49」に詳述している。
- 2) 分析単位数1182のうち、3名一致が558（47.2%）、2名一致が518（43.8%）、不一致が106（9%）であった。

引用文献

1. 安梅勅江（2001）ヒューマン・サービスにおけるグループインタビュー：法科学的根拠に基づく質的研究法の展開．医歯薬出版．
2. 橋川喜美代（2013）幼児の学びの生成と保育の質－テ・ファリキとラーニング・ストーリーの有効性－．兵庫教育大学研究紀要，**43**，9-18．
3. 林悠子（2015）保護者と保育者の記述内容の変容過程にみる連絡帳の意義．保育学研究，**53**（1），78-90．
4. 松井剛太（2015）保育所における保護者の保育参加を目指したポートフォリオの作成．乳幼児教育学研究，（24），39-49．
5. 森眞理（2016）ポートフォリオ入門：子どもの育ちを共有できるアルバム．小学館．
6. 小田豊（2011）子どもの遊びの世界を知り、学び、考える！ひかりのくに．
7. 大宮勇雄（2010）学びの物語の保育実践．ひとなる書房．
8. 佐藤智恵・七木田敦（2009）乳児を育てる母親の変容過程に関する研究－育児日記の質的分析より－．乳幼児教育学研究，**18**，11-18．
9. 柴崎正行・会森恵美（2016）保育所における保護者支援についての検討－「クラスだより」の分析を通して－．大妻女子大学家政系研究紀要，（52），157-162．
10. 高畑芳美（2016）親と子育てを共有する「ラーニング・ストーリー」の試み－子育て支援ルームにおける親子の遊びの記録から－．教育実践学論集，（17），119-129．
11. 請川滋大・高橋健介・相馬靖明（編著）・利根川彰博・中村章啓・小林明代（著）（2016）保育におけるドキュメンテーションの活用．ななみ書房．

謝 辞

本研究の実施にあたり、A 保育園の関係者の皆様に多大なご協力をいただきました。また分析にあたり、植村結花さん、国代侑里さんに協力してもらいました。ここに記して感謝致します。